

春の獣医日記



写真 1 日光浴は全家畜に

昨日往診した血乳性乳房炎の初産牛について反省してみる。往診依頼があったのは分娩後一週間目の頃で一分房のみが血乳との連絡。多忙にまぎれ、もう四、五日様子をみて治らなければ……ということになっていたのである。自然治ゆも考えられたからである。二週間を経過しての現症は全面的に乳房が腫張し、張りさけるばかり。

一分房は血乳を伴う乳房炎、二分房も乳房炎、残る一分房のみが正常であった。血乳という畜主の稟告を信用し早期診断を怠つた自分にも責任はあったが、分娩後は乳熱を起し易いので加減して搾るようにしたという畜

喜びも悲しみも苦しみも楽しみも酪農家と共に、乳牛と共に歩く、いやオートバイに大きなリックを背負って走り廻るファイトマンの記（2）

雪印乳業余市工場

井上武夫

春近し

主側にも問題があつた。……

三月〇日 除雪のブルドーザーの音が町内にひびきわたり、長い冬からの解放に何となく嬉しさをおぼえる。年中を通して繁殖する乳牛ではあるが、やはり初春から初夏にかけては授精も分娩も多く酪農家も獣医も次第に多忙となる。好天がしばらく続くので、今日は酪農家のケツをたたいて廻ることにした。太陽光線が動物の眼を、更に脳下垂体を刺戟しホルモン作用を促し、あるいは皮膚に作用して骨のカルシウム代謝に関与するビタミンDの造成を起すことは、今更口にするまでもなく酪農家達は知っているはずなのだが、終日巡回した所では日光浴をしている牛群は僅か一戸だけにとどまつた。（写真1）

日光浴の理は、わきまえておりながら実行しないことになり、乳房炎については、搾りすぎると必ず乳熱になるという盲信に近い偏った考えが原因したことである。これらのこと自然に悟らせ、そして修得させるために、余りにも時日を要するであろう。やはり尻をたたいて廻る必要ありと痛感。

日光浴の理は、わきまえておりながら実行しないことになり、乳房炎については、搾りすぎると必ず乳熱になるという盲信に近い偏った考えが原因したことである。これらのこと自然に悟らせ、そして修得させるために、余りにも時日を要するであろう。やはり尻をたたいて廻る必要ありと痛感。

3月〇日 いよいよ残す数日で、いわゆる年度変りとなる。前年度をふりかえり、各町村の月別生産乳量を当初の計画乳量と比較してみると、はなし中にも楽しいもの。想いを種々めぐらしている時、集荷費の問題で相談したいというN部落の酪農家Y氏が見えた。

曰く、当部落は遠路のためキロ當り十円（二升十八円）の運賃がかかり、これが酪農の伸びを抑えているので、何かよい方法は

はなく会社で運賃助成を考えてもらえば乳量もふえ、会社にとつてもプラスになると思うが……云々。しばし考え答えることとした。集荷費の問題はN部落だけの問題ではない。そして酪農の伸びが悪いのは集荷費だけが原因でもない。乳量が少ないと絶対といえる程乳熱は起らない。むろん搾乳不足により、しこりがいつまでも消散せず肉乳房になり、また、乳房炎になつたり（乾乳期）なくして分娩に至つた場合、休養させても分娩が幾分早かたり、乳房が分娩直前になつても腫張しない場合こそは乳熱の心配をして搾乳を加減してほしい……と注意を与えておいた。

S部落でも、同じ難問を数年前持ちかけられたが、現在では一戸の酪農家が共用の四輪車をもち、乳量増産に努め一升四円の運賃までこぎつけている。また、A村の酪農組合総会でも集荷費の問題が出た。A村では業者と一緒にいくらの請負制。乳量が増加する五、六、七月は五円ですみ、少ない十一、十二、一月は一〇円かかる。多量出荷の一酪農家が自分の負担する運賃は月に二万円で、全村の三分の一だが、これではやりきれない。皆が多量出荷してくれないと共倒れだ。牛乳増産共励会を乳質改善共励会と併せてやってみてはどうだろう。この声を大きくすれば、皆がこれに共鳴した。これらの事実と声をN部落の酪農家達に聞かせたい。

『苗作り半作』

三月〇日 仔牛を上手に育てる者は

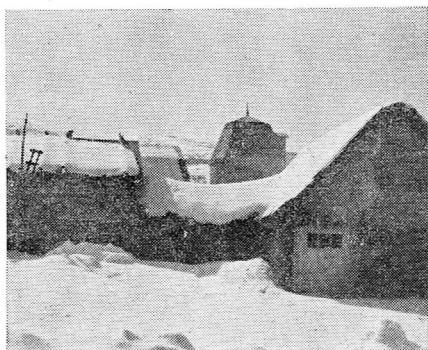


写真 2 離農者が残した施設が惜しまれる

人前の酪農家とは、よくいわれることである。……仔牛が下痢して治らないのだが、カーフミールが悪いのだろうか……といつてくる酪農家を数多く訪問していると、淋しい思いがする。哺乳の仕方も幾度か教えた筈、哺乳器具はいつも清潔に、敷わらはいつも新しく、ガブ飲みはさせるな等々、繰返し口にして来たことが何故か守られていない。そして診察するうちに、踏み入るスキのない不潔な犠房から股と長靴に香り高きものをつけて帰り、愛するカーチャンを泣かすのである。巡回検診の帰途、分娩後、約四〇日になる犠をもつ酪農家を訪ねてみると、犠の部屋をのぞいていると、若娘さんがやつて来た。まもなく彼女は屋上から乾牧草を抱いて降りて来た。もちろん、犠にも与えられることを予知したが、搾乳牛だけの様子。……ねえさんや、この仔牛にも牧草をやりなさいよ……だつて獣医さん、その仔牛まだ四〇日にしかならないのだよ、牧草なんかたべないでしようや……。

牛後四〇日、乾牧草を与えたことのないこの証言に、ただ恐れ入った。……それなら、乾草をやつてみてたべたらどうする?……というと、信じられない表情である。彼女が持つて来た乾草を繩でしばるや犠の鼻先に差し出すと犠は威勢よくたべ始めた。……に驚いてみつめる彼女に犠の胃袋の発達過程と粗飼料の必要性を笑いながら説明し、糞尿のついたものは下痢のもと、乾草は犠房の中に投げ込まないようにして与えることをつけたした。

『開拓地の春』

三月〇日 雪が消えると春耕で忙しくなるというので、開拓部落へ乳牛の検診と酪農指導をかねて出かけることにした。軟雪とドロソコの山道をオートバイで走ること二時間、更にそりにゆられて二時間、酪農家達は部落唯一の集合場所婦人ホールで首を長くして待っていた。予告の甲斐があつて出席者も多く、指示通りエンシレージと乾牧草が持参されていた。エンシレージと乾牧草の品質鑑定を指導する目的は、今春の播種期を前にして品種の選択を学ばせ、更に適性な収穫を期待するためである。鑑定結果は決して好成績とはいひ難かった。

エンシレージにおいては、適性pH三・三も僅かである。実の成熟程度だけは刈遅れだけあって充分、細切度は一〇一~一二パで略々良好であるが、カッターの刃が研磨不充分か刈遅れの故か葉や葉しよう部が細切しきれず多量混入している。乾牧草においては、緑度六〇以上ではなく、五〇以下ばかり



写真 3 給水場が設けられているIさん宅の運動場

り、中には三〇、二〇あり。刈取時の生育ステージは出穂終期から開花期以上のものが多い。科の混入度も低く、香氣に乏しいものが多かった。翌日は朝から兔の足跡しかない雪山を越えて、酪農家の牛舎から牛舎へと歩いた。初春の雪に長靴をとられながら……。昨晩、夜の更けるをも忘れて数人と語り合つたことがひびいて、昼頃にはもう足がもち上がりない。この部落で最も多頭飼育をしているIさん宅にたどりつき昼食となる。搾りたての牛乳とうみたての卵、奥さん自慢のホットケーキで元気をとり戻す。雪道を案内してくれたYさんと三人でしばし酪農談義。Yさんがいう。……うちの息子は何もとりえないが牛の好きなことは確かだ。それに、いい嫁が来てくれたし、ここ二、三年辛抱すれば楽になるだろう。畑作は一切やめて牧草地を拡げることだ……。今度はIさんがいう。……今まで息子に手伝つてもらったから、これからは息子に一切まかせて今度は手伝うことにしようと思う……。

他の開拓地では離農者がおり、また酪農基盤が完成し軌道に乗りながら、長男が、若夫婦が引継いでくれないと嘆く酪農家があるのに何と幸福な酪農家達であろう。その後、決して経済的には裕福でないこの開拓酪農家の眞のしあわせを感じさせられ、将来の発展を祈らずにおれなかつた。(写真3)

3) 無事帰宅すると、一晩家をあけただけだ

が子供達は待ちこがれてか抱きついて來た。開拓のランプ生活の一晩を家族に語りながら食膳につけば、農村の諸問題がテレビで報道されている。農村における労働力の問題、農村青年は逃げ腰でいる……等々。そして最後にある酪農家夫妻がこういってゐた。……酪農高校を出た息子が、余りにも問題が多い農村の将来を悲観し農家をやりたくないといつて出した。よく話し合つた結果、息子のいう通り乳代の一割(当時四千円)を毎月小遣いとしてやることとした。現在は一万円余にもなつてゐるが、その時息子にも条件を申し入れたのです。……将来、父さんや母さんが定年になる頃には、同じように一割を渡してくれるかどうか……。こうして月給制度をとり入れた現在は、昭和五十年頃に年間一千万円の目標、百万円の夢を抱いて共々頑張つてゐる。親子の間であつてみればなおさら、難問は割切つて考えてよいのではないか。——酪農青年よ案する勿れ、行なうは易し——